



謹んで新春の御祝詞を申し上げます。

昨年にも皆様にご多大なご協力を賜り心から御礼を申し上げます。令和三年の新年を迎え、サイクラーズグループは更に皆様のお役に立てるようにサーキュラーエコノミーを推進致します。

昨年初めより新型コロナウイルスの感染症「COVID19」が蔓延しはじめ、世界中が翻弄された一年でした。年末よりやっと開発されたワクチンが世界各地で接種開始となり、日本も春頃には順次使用の目途がたちそうです。収束を信じ、持続可能な社会への一助となるべく、業務に邁進して参ります。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

## Market Forecasts by Y. san

12月予測の自己評価 鉄スクラップ：○ 銅：× アルミ：○

### 鉄スクラップ

11月は指標になる東京製鉄宇都宮工場特級価格26,000円/トンでスタート。ベトナム向け輸出価格上昇により数か月ぶりに500円/トン上がり最終的には28,500円/トン。12月1日から29,000円/トン。12月に関しては国内相場に大きく影響を及ぼすベトナムの買い意欲が旺盛なことから、さらに上がると思われま

### 銅

11月はLME6,700ドル台/トン、国内銅建値750,000円/トンでスタート。約7年ぶりの高価格を付けるほどLME価格が上昇し、最終的にはLME7,650ドル台/トン、国内銅建値810,000円/トン。12月は新型コロナワクチンの開発により、景気回復の期待から、さらに上がると思われま

### アルミ

11月はLME1,840ドル台/トンスタートし2019年3月以来の高値になり、最終的には2,000ドル台/トンまで上昇しました。12月に関しては、工場発生が相変わらず少ないことから、さらに上がると思われま

### 産業廃棄物

新型コロナの影響により在宅が増えオフィスゴミが激減。また、オフィスの縮小が多くなり事務所移転業者はかなり忙しい。来年がピークになるでしょう。中間処理業者はどこも異物混入に悩まされています。業界全体で発火性がある廃棄物の受入は断固断る姿勢が必要です。どうしても検収の緩い会社に悪い荷物は集まります。

## Topics

### リサイクル鎖国時代

サイクラーズ(株)代表取締役 福田 隆

明けましておめでとうございます。

昨年は激動の時代の中でも特に色々と考えさせられる年でした。今年はどうなるのでしょうか。

さて、私たちの資源リサイクル業界は今、鎖国時代に突入しつつあります。バーゼル法改正の機運が出始めた後、世界から資源を集めていた中国が2017年に国門利剣(ナショナルソード)を発表してから潮目が変わりました。複合素材、異物混入などの混じり物は相手先国で環境汚染をもたらし、中国以外の国でも貿易が制限されつつあります。わが国でも2018年のバーゼル法及び廃掃法改正され、今年1月からは更に廃プラ関連のバーゼル法改正があり、輸出が抑制されることとなります。

更にコロナ禍によって、人は鎖国し、再生資源の半鎖国が加速しています。私たち資源リサイクル業がすべきことは明確です。廃棄物処理されるものから、再利用できるものを取り出し流通させ、それ以外のものは再生資源として使える状態にする事でしょう。きれいな品質の高いものは鎖国時代であっても、国内メーカーは使ってくれるし、輸出も出来ます。その機能を高めていくことが肝要です。

廃棄物の発生抑制(リデュース)や再利用(リユース)、再生資源の最終商品化(個別素材スクラップ化)を進めていくことをいわゆる3Rと言ったり、シェアリングエコノミーやエコデザインと組み合わせるとサーキュラーエコノミーと言ったりします。ただ、難しく考えることはありません。

不用品に残った価値を最大化する。それを考えれば、自然とサーキュラーエコノミーになるのです。そしてサーキュラーエコノミーは江戸時代の日本人がやっていたことでもあります。

傘を貼り直し、草鞋を縫い直しして使い、かまどの灰を集めて灰汁にしてアルカリ原料にする、ゴミを履き寄せて燃料にする。江戸時代にはゴミという概念がほとんどありませんでした。江戸時代にやっていたことを、現代版に置き換えていくのです。

サーキュラーエコノミーへどのようにアプローチしていくのか。最も環境負荷の少ない高位循環である、リユースになるべく多くを回していくにはどのようにすればよいのでしょうか。まずは簡単なところから始めるべきと思ひ、弊社の場合はリメイクに取り組み始めました。中古品としては流通しない机にきれいな木天板を装飾して、使ってみたいと思える小洒落た家具に仕立て上げる。これがまた楽しく、リサイクラーとしてモノづくりの楽しみまで味わう事が出来ます。収益化できれば完璧でしょう。

私たちにこれからの鎖国時代を生き抜くための文化的背景も知恵もあります。2020年は大変な苦勞をしています、そんな中でも楽しみな点があるものです。あとは行動するだけです。

## Series

### 「水底の花」(2)



営業部 柳葉明未(文と挿絵)

第2回目ですね、こんにちは。上り坂の多さに、「この坂は必要なのか?」「坂多くない?」「どうあがいても坂」と思ってしまう横浜の民、柳葉です。大体どこ行っても坂がありますので お出かけの際は歩きやすい靴でお越しください。完全に横浜あるあるで味をしめています。3回目、4回目もこの調子で始めることでしょうか。第1回目に続き、ソフト煎餅感覚でサクサク語って参ります。

1700年ほど前に突然変異として見つかった金魚ですが、日本に金魚初渡来したのは室町時代とされています。(※諸説あり)当初富裕層に浸透し、紆余曲折あって江戸時代が進むにつれて「きんぎょ」や「こがねうを」とも呼ばれ庶民の間に浸透していきました。今で言うセレブ芸能人が使っていたものが、SNSに掲載されて流行るみたいな感覚です。まあ、この後贅沢禁制の槍玉にあげられて放逐されたりします。金魚の世界も世知辛い。さらに年月が経ち、一八世紀に入った江戸では金魚の大流行が始まります。この頃には価格もおちて金魚自体が珍しくなくなったのもありますが、『びいどろの金魚玉』が登場したのが一役買ったと言えるかもしれません。『びいどろの金魚玉』とはなんぞや、蜻蛉玉の親戚か?と疑問に思われるかたも居るかと思ひます。ガラス製の風鈴の傘を逆さにして水と金魚を入れた物を想像していただけたとよろしいかと。

当時は技術的に現代の金魚鉢のような大きいガラス容器が作れませんでしたから、水と金魚を入れて紐で吊るしてでも女性が指先で下げられるような小さな器で、軒先に吊るして眺めたりしたそうですよ。さて、ここでなにが革新的かという、金魚を「横からも見る」ことができるようになったこと。(ちなみに横から鑑賞するのは「横見」といいます。)水族館で鑑賞する方法と同じで、昨今話題のアクアリウムもこちらがほとんどです。金魚玉が登場するまでは、金魚は池や陶器に入れて上から鑑賞する「上見」がメインでした。要は金魚すくいする時のスタイル。大人も子供も膝を交えて眺めるのを想像すると、なんだか可愛らしいです。金魚が中国で誕生して以来、金魚は「上見」に相応しい形に改良され続けてきたこと。例えばランチュウは横から見ると背鰭が無くずんぐりとした見た目ですが、上から見ると印象が変わります。後ろ千両前一文ならぬ、上見千両横見一文(※勿論横見映えの金魚もいます。)何事も、

いつもとは違う角度から眺めてみると、また違った発見がありそうですね。続きは次回に・

